

# 「図会もの」補説

—山田意齋の読本をめぐって—

「国文学攷」第二十二号に、「後期読本群の一分野—「図会もの」について—」と題する論稿を発表したが、その論稿に二・三補っておきたいことが生じたので、貴重な紙面をさいていたゞくことにした。

前に発表した論稿の要点を今一度復習すると、次のようである。寛政十一年に刊行された山東京伝の読本の初作「忠臣水滸伝」前編の成功が一大転機となつて、読本の主流が上方から江戸へと移つたが、その時斜陽の影濃い上方出版業界の苦肉の策の一つとして、名所図会流行に便乗した「図会もの」とも呼ぶべき読本の一群が出版されている。その「図会もの」の体裁は、絵柄に至るまで名所図会に酷似しており（絵師が共通という点もあつて）、その内容は、先行の戦記物語などの焼直しといったもので、秋里籬島という本作りの手になつたものである。この転換期に姿を見せた「図会もの」は、文化・文政という江戸読本最盛期には全く姿を見せないが、読本の衰退期に入った天保年間から再び姿を現わし、幕末の読本界

に一つの彩りを与えている。この幕末期の「図会もの」の体裁・内容は、ともに初期のものとはほとんど変りがなく、また主として上方の読本作者の手になつてゐることも共通である。

いづれにしても、この「図会もの」は、創作力不要の文学であり、出版業者の商業政策上の産物であることに變りなかつた。

## 二

岡麓編の「日本小説書目年表」を見ると、作者不明、刊年不明の読本が数多く見られるが、「図会もの」と呼ばれる読本の中にも、それが相当数存在する。それらを調査していくと、幕末期「図会もの」作者として、山田意齋の名が大きく浮び上つてくる。

山田意齋の読本目録を試みに作成してみたので、次にそれを掲げてみる。

### 山田意齋読本目録

1、絵本楠公記 初編五 連水春曉齋画 享和元年刊 半紙本

山田得翁齋述 と見える。全三十巻で完結。二編以後六編までは  
速水春曉齋の自画自作。これについては、浜田啓介氏「畫本讀本  
の作者速水春曉齋伝攷」(国語国文第三一七号)に説がある。

2、新編水滸傳 六 東南西北雲画 文政元年刊 半紙本  
「篤者浪花好花堂野亭」と巻末にある。好花堂野亭は意齋の別  
名。源平合戦頃に材を求め、水滸伝に附会した作品で、江戸風の  
本格的説本である。

3、昔語茨の露 六 葛飾戴斗画 文政三年刊 半紙本  
序文 文政二年 南里亭共楽。仇討もの本格的説本である。  
4、楠正行戦功圖會 前編五 西村中和画 文政四年刊 大本

後編六 全右 文政七年刊 大本

日本小説書目年表には作者名なし。巻一の冒頭に浪速野亭散人考  
訂の署名があり「以後大阪出版書籍目録」の中にも、作者山田圭  
藏(阿波橋町)板元河内屋源七(伝馬町)とある。意齋の図會も  
の初作であり、幕末期図會のもの初作でもある。

5、義経殿功圖會 前編五 西村中和画 文政八年刊 大本  
後編五 全右 文政九年刊 大本

日本小説書目年表では、作者・刊年とも未詳。島津久基博士著  
「義経伝説と文学」では、浪速好華堂野亭著、安政七年刊とあ  
る。これは、序に「政甲」とあるので安政七年とされたのであ  
らう。巻頭に浪花山田敏雄散生考訂とあり、刊記は前記の通り。

6、義経繪本金石詞 一〇 初編北田画 文政十年刊 後刷本 半紙  
本

日本小説書目年表には、文政十一年刊 山田突山子作 とある。  
これは後刷本をもって記載したものであろう。後刷本では、序に

文政十年、刊記に「文政六年正月求板」とあり、巻末「復讐千丈  
松」(未見・柳園種春著文政十一年刊・日本小説書目年表)廣告  
に、「今文政十亥年夏新に古老の伝話を得て云々」とある。これ  
によると、後刷本は文政十年頃刊、初板は少くも文政六年以前と  
ならなくてはならない。初板本未見であるから、一応後刷本で刊  
行順とした。

内容は、冒頭の註記に「山<sub>田</sub>桑子曰金石詞意本此二条而附會之以  
劇場所謂秋葉権現廻船話亦是紙上一劇場而已」(此、二条とは搜神  
記の干将莫耶の雌雄の劍説話と、昔語の雷煥子の説話を指す。)と  
あるによって明らかである。意齋の代表的な本格的説本であ  
る。

7、義仲殿功圖會 前編五 有阪齋齋画 天保三年刊 大本  
後編五 全右 天保七年刊 大本

日本小説書目年表では、作者・刊年とも未詳。「以後大阪出版書  
籍目録」の中には、作者山田圭藏(佐渡島町)板元河内屋喜兵衛  
(北久太郎町五丁目)とある。所見本(後刷本)の表紙裏に好花  
堂主人著編、各巻冒頭に、浪速山珪士信考訂と見える。

8、義経國姓爺忠義傳 後編一〇 石田玉山画 天保五年刊 半紙本  
日本小説書目年表には、「以後國姓爺忠義傳 二三 石田玉山画作  
文化元年刊(附台湾記、天保四年に完結)」とある。「以後大  
阪出版書籍目録」には、國姓爺忠義傳後編十冊 作者 大和屋圭  
藏(末挽町中丁)藏板主 右同人 賣弘柏原屋源兵衛(心齋町)  
とある。後編初冊巻頭に、山圭宇士信譯と見える。

内容は、後編の序文に  
○一前略一故玉山翁著會國姓爺忠義傳千世行欲著編其次編及台湾

記図画已成矣然一朝臥病身歿而不遂後終著十年書房某就小生需補之因以參考明清閩記國姓爺傳台灣鄭氏紀事等編述後傳十卷加故翁之画應聊其需爾 天保四癸巳秋九月 山珪士信

と見えるごとく、鄭成功の事績を抜かつた戦記ものである。

9、復讐梅菊新話 六 天保六年刊

未見。日本小説書目年表には、好華堂主人作 とある。

10、部領使世継草紙 一〇 天保九年刊

未見。日本小説書目年表には、好花主人作 芝蘭処士序 とある。

11、釋尊御一代記圖會 六 前北齋卅老人画 弘化二年刊 大本

日本小説書目年表では、作者・刊年とも未詳となっている。所見

本表紙裏に、山田意齋叟参考、巻頭に、浪華好花堂野亭考選とあり、刊記に、大和屋圭藏参考 弘化二年乙巳四月 とある。

12、大伴金道忠孝圖會 前編五 柳齋重春画 嘉永元年刊 大本

後編五 全右 嘉永三年刊 大本

13、扶桑皇統記圖會 前編一〇 柳齋重春画 嘉永二年刊 大本

後編一〇 全右 嘉永三年刊 大本

日本小説書目年表では、嘉永年間刊 とあるが、所見本により訂

正。なお所見本裏表紙に、浪華好華堂主人著編、巻頭に、浪華堂

野亭参考 と見える。

遺漏もあろうが、以上の目録十三部の説本のうち、図会ものと呼

ばれうるものが六部まである。日本小説書目年表では、このうち「大伴金道忠孝図会」「扶桑皇統記図会」の二部のみが意齋の作品とされていたが、「補正行戦功図会」「義経勲功図会」「義仲勲功

図会」「釈尊御一代記図会」の四部も、何ほどかの意味において、彼意齋の手を経て作られたものであることが判明した。こうしてみると、東鑑亭主人（京都の人、池田氏、尙古館主人等の別号あり）の「北条時頼記図会」一〇石川半山画嘉永元年刊 など少数のものを除いて、幕末期に上方で出版された図会ものの過半は、意齋の手を経ており、そういう意味で意齋が注目すべき作者の一人ということもうなずかれるであろう。

江戸の地においても、幕末期に図会ものが現われており、主として説本全盛期の化政年間に活躍した高井岡山の「平家物語圖會」前編六有坂蹄齋画文政十二年刊・後編六有坂蹄齋画嘉永二年刊 とか、幕末期に人情本の作者として売り出した松亭金水の「頼光朝臣勲功圖會」一〇歌川貞秀画嘉永五年刊 とかを見ることができ、岡山にしても金水にしても、むしろ江戸前の本格的説本―それは「星月夜頭晦録」初編一六編三〇高井岡山作蹄齋北馬画文化五年一〇文政九年刊 とか、「繪本阿佐倉日記」一・二輯一〇松亭金水作歌川貞秀画嘉永五年刊 とかいったもので、その価値を高く評価できぬものではあったが―に取り組んでいた人々であつて、意齋ほど図会ものに身を入れていないから、意齋は上方だけでなく、上方・江戸を通じての図会ものの主要作者として注目される。

### 三

初期の図会もの、例えば秋里薩島の「源平盛衰記圖會」六石田玉山画安政十二年刊 についていえば、体裁は大本で挿絵多く、内容は字句の取捨撰択や、挿話の取捨撰択を行つても、ほとんど源平盛衰記そのままの敷き写しといったものである。意齋の図会ものと

て、体裁は大本であり、挿絵も、初期の図会ものに多く画いている西村中和を含めて画師は様々だが、相当数挿入されており（絵柄は初期の俯瞰図的描写の景色とか群衆とかが多いのに対して、一般の読本の挿絵と同様に武者絵などの人物像が多くなつてはいるが）、装釘がいくらか上等になつてはいる。初期の図会ものと同じである。その内容として、必ず種本がある点、全く同一といえる。

しかしその内容を精査していくと、「源平盛衰記図会」における源平盛衰記というほどの類似性を完全に当てはめることはできないようである。今は、まず「大伴金道忠孝図会」を探りあげてみる。

もちろん「大伴金道忠孝図会」にも種本はある。それは「大友真鳥夷記」一〇畠山竹隠齋編録元文二年刊（享保二十年序）であり、その原拠とした有様は、次にかかげる冒頭文の比較で明瞭である。

●天ノ覆フ處地ノ戦ル處。孰カ人倫ナカラシ。孰カ人道無ンヤ。サ  
レバ大成至聖文宣王。麗九夷ニ居ン。事ヲ欲シ玉フ歎アルモ。中  
華ニ優レル。必ズ無ンバ有ベカラズ。奈クモ吾秋津嶋ハ。神代  
ノ古ヨリ打籠テ。祚ノ皇統絶セズ。最モ目出タキ例ナリト  
テ。異國ヨリモコレヲ貴ミ。君子閑ヲ以テ稱スト云リ。爰ニ人皇  
三十九代：（大友真鳥夷記巻頭）

●話説天の覆所地の戦所。孰の邦か人倫無らん。孰の州  
か人道無らんや。世界萬國百般國風を立る中にも。悉くも  
わがおほまこと。秋津洲の皇國ハ。かけまなくも。恐惶天津祚の皇統  
吾大日本。秋津洲の皇國ハ。かけまなくも。恐惶天津祚の皇統  
運綿とらう績。三綱五常の政務。明正なる事。敢て異域の能及

ぶ處にあらす。されば文國と稱する中華人も。吾皇國を貴て  
君子國とハ称けり。茲に人皇三十八代の聖主……（大伴金道  
忠孝図会巻頭）

これで見ると、全くの敷き写しとも見られるが、本筋に入ると種々の違いが目につく。第一、丁数はほとんど同じであるが、一丁分の字数が約二倍ある「大伴金道忠孝図会」の方が、はるかに長い物語になつてはいる道理であろう。構想の主要には変化がないのであるが、細部にわたつてみると、字句だけでなく構想に至るまで変化が見られる。その変化は、各デテールを細かく描写しているというだけに止まらない。

その変化の様相を少し整理してみよう。

①構想の拡大

忠孝図会を真鳥夷記と読み比べていくと、忠孝図会の方がスケールが大きいように感じられる。その最たる原因は、傍系説話の巧みな付加拡大にあると思われる。

忠孝図会では、構想の主軸をなす悪逆の臣大友真鳥と、真鳥を父の仇とねらう大伴金道の話のほかに、軽大臣と百合稚大臣の二つの説話が大きく参加している。この二つの説話は、真鳥夷記に全然見られなかったというのではなく、その萌芽ともいふべきものが備わつてはいた。

真鳥夷記巻之一で、百濟救援におもむいた日本軍が大唐軍と戦う場面があり、そこに薩摩の軽大臣と豊後の和田丸とその郎等別府兄弟という勇将が現われ、勇戦敢闘している。そして本文より一字下げた注記の部分にこの二人をとりあげて、まず  
○按ズルニ軽大臣ノ事。世ニ云傳フル處ハ。云々  
と軽大臣の伝説を略述し、「此事實録ニ見ヘズ」として、

○此本文ノ如ク輕大臣ハ、薩摩ノ住人ニシテ。今度百濟加勢ノ一員タルヲ明ラケシ。

としており、また太宰の和田丸についても、

○今度異國ノ戰場ニ屢合戦アリシユヘ。唐兵ノ異名ニ百合弱ト呼ケル由。一中略一百合弱モ戦フベシト云義ナリ。一中略一吾日本

ニテハ。百合ノ二字ヲ百合ト訓ジ。弱ノ一字ヲ弱トシテ。或ハ

ニ本朝ノ俗百合弱麻呂ト稱ジアヘリ。是モ大臣ヲ呼名トシテ。或ハ

百合弱大臣ト云ヒナセリ。今ノ俗交界ガ嶋ニテ。郎等別府ノ野心

ヲ起セシ説アリ。其據アルヲニヤ。免角此節ノハ。多ク筑紫ノ

國司等。或ハ陪臣ナンドノ私ノ家事ナレバ。朝廷ノ實記ニハ漏タ

ルヲ多シ。サレバ此等ノ事實ヲ。前後具ニ考フルハ。或ハ其子

孫末葉。亦ハ所縁ノ手筋アル。家々ニ便リテ。其秘記ヲ見ルニ非

レハ。詳ニ識シガタシ。大友ノ真鳥ノ事實モ。公ノ實録ニハ。詳

ラカニ備ハラザルモ。亦此タダヒナリ。

として、輕大臣・百合稚ともにその伝説を虚妄のこととして斥け、

一方大友真鳥の事実が史実に依わらない理由を弁じながら、真鳥史

記の記述を事実として強弁している。そしてこれ以上この二人の伝

説上の人物を活躍させていない。

伝説上の人物をとりあげながらも、その人物につきまといっている

伝説を否定し、大唐軍と戦った人々の一員として点綴してきたのに

は、伝説を史実でないか否定することによって、同じく伝説上の人

物である大友真鳥についての記述を史実として印象づけるという効

果をねらったのか、その意図は今分明でないが、いずれにせよ何ら

かの効果を期待したのであろう。が、わざわざ連れ出した二人の人

物を、伝説として否定し去っては、少くも物語の上での効果はないといえるであろう。

これに対して忠孝園会では、この二人の伝説を最大限に利用しよ

うとしており、その上これらの伝説が大して危なげなく全体の構想

の中に組み込まれている。たとえば全篇にわたって活躍している輕

大臣の息春衝の場合をみると、燈台鬼とされて辱しめを受けた父の

霊を供養するため、新羅討伐軍に参加するが、沙比岐怒江城攻略の

軍功を大友真鳥に一人占めされ、さらに重病を治してくれた垣雅明

の妹で、恋人となっていた月小夜を真鳥に奪われるという非運に陥

る。春衝が、最後に真鳥討伐軍に加わって、そのうらみをはらすの

も当然という筋立になっている。こうしてみると、挿話の一つとし

て出発した輕大臣燈台鬼の伝説も、構想展開の本筋に参加し、それ

を助けているといえるのである。百合稚大臣の伝説を挿入する場合

も同様のことがいえ、挿話の添加で起しがちな構想の破綻を招いて

いない。

この様な手法は、史実として扱かおうとした真鳥史記と違って、

歴史小説としての忠孝園会スケールの大きさを感ぜさせるのである

が、これはこの二つの例に限らず、細部にわたって見られる傾向

で、しかもそれらが常に主軸となる大友真鳥の物語を助ける形で挿

入添加されている巧みさは注目される。

②構想の因果的展開

ある事件が起ると、その原因と結果が、因果応報という形をとってではあるが、それはそれなりに納得のいくように構想されているのを、こゝういふ言葉で現わしてみたのである。たとえば、垣雅明は真鳥に阿諛して股肱の臣となり、金道に内通

しながら真鳥に悪逆をすすめ、真鳥の没落を早めるといふ重要な役割を演ずるが、なぜ雅明がこのような働きをするかという原因について、真鳥実記（実記では植稚郎と名付られている）では、雅明が金道に内通する場で

○我姉先年金鳥ニ宮仕セシニ。傍人ノサムヘ事ニ依テ。金鳥甚ダ怒リ。蛇賣ト名付多クノ蛇ヲアツメ我姉ヲ三日三夜ニ賣殺セシナリ。老母ナル者コノ悲歎ニ身ヲ苦シメ。悶心シテ病死セリ。此恨我神魂ニ徹シ一略一と、簡単な説明を本文より一段下げた注記の形でしているに過ぎない。

これに対して、忠孝図会では、軽春衛と相愛の關係にあった妹月小夜が、真鳥のために強引に妾とされ、その上春衛と姦通したという汚名を漬せられて、加賀騒動の政尾蛇賣めの場面を想起させる残酷な刑罰に遇つて殺される。そして、その悲惨な場面を詳細に描写することで、垣雅明の怒りに同感させるよう仕組まれている。この場面が設定されていないければ、後に見られる雅明の活躍の動機に同感できず、雅明の行動は宙に浮いたものとなつたであらう。真鳥実記では、まさに宙に浮いた感じがするのである。

物語展開の辻褄があつていふという点では、次のことも注目される。大友真鳥を父の仇とねらう金道の聰明勇武については、真鳥実記・忠孝図会ともに、彼の幼時の奇童ぶりを描いているが（とより忠孝図会が真鳥実記をそのまま敷き写しているのだから）、真鳥実記の場合、少し説み進むと、その金道は本当は忠臣龜山太皇の子で、幼君の身代りに育てられていたということが判明し、折角主役金道の聰明勇武に費した筆が宙に浮いてしまつてゐる。

その点、忠孝図会では充分意を用いた様子がかがえ、幼君金道丸の身代りになるという場面もあるにはあるが、色々の事件を終た後もとどおりになつていて、金道のために費した筆がそのまま生きているのである。

構想の因果的展開といへば、当然勧善懲悪という理念を伴うのが例であるが、その理念を満足させる方法としては、登場人物の性格を善と悪とに明確に描き分けようと努力するのが常套手段といえる。真鳥実記における大友真鳥は、確かに、豪勇であるとともに悪逆非道の人物として描かれているが、忠孝図会を見ると、それが一層徹底して描かれていて、例の常套手段を適用しているのが判る。

たとへば、前述した沙比岐怒江城攻略の場面でも、真鳥実記では、真鳥一人の智略・勇武によって攻略が行なわれたことになつており、その限りでは真鳥は武功拔群の勇将としか思はず（この場面が真鳥の最初に出てくる場面なので一層のこと）、後になつて悪逆の臣として取扱われるのは、首尾一貫しない構想といえる。

忠孝図会では、その場が、軽春衛の智略に真鳥が参加して、その強勇ぶりを発揮し、清正流に虎退治までして攻略戦に成功することになつており、後で春衛の智略を無視し、その戦功を一人占めしている。大友真鳥の、強勇であるが智恵浅く、しかも強欲な人柄が明らかにされておき、後々の真鳥の行動と照し合せて首肯できるように描かれている。

忠孝図会では、これだけに限らず一般に善と悪との区別を明確にすべく、その形容にいたるまで気を配っているようである。その努力は、登場人物を一層生氣のない類型的な人物にしてしまつてはいるが、それはそれなりに首尾一貫した構想として受けとられるとい

う成功を取めている。

### ③怪奇性

真鳥夷記にも、寛平狐という狐が出てきて、超自然的色彩がないわけではないが、当時の人々にとって狐が人間に化けたり、人間に仇したり功德を施したりするという事態は、それほど常識外れのことではなかったであろうから、ことさら怪奇的色彩が強いとはいえないのであるが、忠孝図会では、この怪奇性が非常に強く出ている。寛平狐が真鳥夷記以上に活躍するのはいうまでもないが、真鳥に虐殺された垣雅明の妹月小夜が亡霊となって現れ、自分に姦通のぬれ衣を着せるべく奸策をめぐらした真鳥の側妾を一人ずつとり殺し、真鳥をも苦しめる。また真鳥に裏切られて憤死した大友皇子は、時平を苦しめた菅原道真を彷彿させる雷神と化して真鳥を苦しめ、絶せしめる。これのみに限らないが、特にこの二つの場面は、その挿絵とあいまって、相当効果的に怪奇性をたゞよわせている。

以上列挙してきた真鳥夷記と忠孝図会との相違は、何を意味しているのであらうか。忠孝図会において新しく付け加えられた諸特長を一見して判ることは、いうまでもなくそれが滝沢馬琴などすぐれた江戸の説本作者の手になった説本の諸特長と一致しているといふことである。もちろん、忠孝図会が祖述した真鳥夷記に、中村先生が娯楽説物化した軍談という定義を下されたように(註一)、発生期の説本としての位置づけも可能であるだけの説本の要素が備っていたのであるから、忠孝図会成立の功の大半は真鳥夷記にゆずらなければならぬとしても、忠孝図会の作者意齋が一層説本の粉飾をこらすべく大いに努力している点は認めなくてはならない。そしてこの事實は、秋里籬鳥など、完成した本格的説本を知らない初期の図会

ものに見られる、単純に先行の戦記物語などの敷き写しをするという図会もの作りの方法と比較するとき、化政期の江戸説本全盛の風潮を経験した作者にあって初めて作り出され得るものだとの感じを抱かざるを得ない。事実作者の山田意齋は、「秋里籬鳥絵本金石譚」のよるな正統的な江戸説本の製作方法に依っている作品を作って成功しているのであるから、説本の諸特長、説本製作のコツは充分心得ていたはずで、「大伴金道忠孝図会」の製作に際しても、一応図会もの製作の方法に依りながらも、本格的説本製作の腕を活用したといえるのではなからうか。

### 四

意齋の図会ものうちで、江戸の本格的説本の洗礼をもっとも強く受けているのが、この「大伴金道忠孝図会」といえると思うが、意齋の他の図会ものも大なり小なりその傾向を認めうる。図会ものこととて、種本は必ず存在するが、初期に見られた図会ものと同じには扱えないようである。

「義経興廢記」十二・小幡邦器・元禄十七年刊 を種本にして「義経勲功図会」(この「義経勲功図会」の種本は、同名の「義経勲功記」十九・馬場信意・正徳二年刊)と思われやすいが、事實はそうでない。次にかかげる序文

③―前略―書肆石倉堂曾收義仲記之古本其文辞富胆叙事似詳而闕如者又多矣益請余因参考於諸史增補足正更加画図名曰義仲勲功圖會以備童叟婦女之覽云爾

岩天保龍集壬辰仲春(浪速市隠野亭外史義仲勲功圖會序文)によっても判るように、「本曾義仲記」十・正徳二年刊 を種本と

している「義仲勲功図会」(ただし、この序文は、「義経興廢記」の序文をそっくりそのまま標榜している。)にしても、全体の構成は正史によりながら各部分に「中將姫行状記」七致敬編享保十五年刊、「泉州信田白狐伝」四誓誓室曆七年序、「安倍仲磨入唐記」四誓誓室曆十年序 といった長編伝教説話ものに見られる俗説をそのまま組み込んでいる「扶桑皇統記図会」にしても(註二)、決して種本をそのまま敷き写してはいない。

「義経勲功図会」でいえば、次の跋文

④—前略—余徒幼好於稗史院本。讀之而不知倦。稍及長亦耽野乘戲化。頃日懸書肆某篋。拾遺於源廷尉之功績事實。合爲前後十卷。名以義經勲功圖會。原野俚鄙俗而徒爲蛇足之說者。採兒女嬰孩之觀而已。其事積真身僞。固不論也。著書而以傳英雄豪傑乎。借英雄豪傑而以伝虚誕乎。嗚呼亦婦一渺忙耳。余九泉之下深慙故人云爾。

文政九丙戌春正月日 浪速 山田敏雄跋 (義経勲功図会)

跋文)

を見て判るるように、正史にはこだわらず義経に関連した全ての諸説話をたとえは淨瑠璃姫との情話も、熊坂長籠退治の武勇談も、弁慶の勲進帳も、さらには蝦夷に渡海し金国まで攻め込んだというジョンギスカン・義経同一説に至るまで、平家討伐という史実と併せて、もっとも通俗的に集大成するという方向で、「扶桑皇統記図会」でいえば、中將姫から弘法大師に至る様々な人々の民間俗説を採りあげながら、当時の風潮である尊皇主義に便乗しての通俗日本史という方向で、それぞれ意齋の手が加えられている。

この手を加える手法には、「大伴金道忠孝図会」で見たごとく、江戸の本格的読本の洗礼を受けた跡が濃厚だといえる。たとえば、

「義仲勲功図会」を見ると、義仲と巴御前とが結びつく様子を、今井兼平らを連れて諸国遍歴に出た途上、大垣の地で荒馬をとり静めた巴御前の勇力を見せめ、郷土である父安太夫に懇望して盃をとりかわすというふうに構想している。将来の雄飛のため諸国の事情を視察し頼朝と盟約を交すという目的で諸国巡歴に出かけ、諸々で武勇を顯すという構想からして読本的であるが、智勇兼備の若武者が、孝心厚く勇力無双の美女と将来を約するという場面の挿入は、もちろん従来の義経伝説にあまり見ぬところであり、全く本格的読本説話中の感があるのである。そしてこういう場面は、意齋の図会ものに強弱の差はあれ常に見出されるものであった。そこに、文化・文政の江戸の本格的読本全盛期を経過した位相において読本製作に従事した意齋の図会もの特質があるのだと言いうるであろう。

以上、意齋の図会もの紹介に当り、やや彼の図会ものを過大評価したきらいがあるが、この評価はあくまで初期の図会ものや、幕末期においても「一休諸国物語図会」五平田止水・菱川春春画天保七年刊といったものに比較していえることであり、所詮江戸の本格的読本には遠く及ばぬ作柄で、下降期に入った幕末の読本界において、上方の出版業者の失地回復をねらった拙速主義にうながされて製作されたものであらうとの、前稿の主旨を変更させるものではない。

## 五

山田意齋については、浪華人物誌卷三に

○ 好花堂野亭

姓は山田氏案山子と號す俗稱主藏浪華の人初め書家にして狂歌を

善才戯作を好んで著述す小説雜書淨瑠璃等數多あり後剃髮して意齋といふ弘化三年丙午十一月廿四日没年五十九

とある以上に付け加えるべき資料を持ち合せない。が、義太夫年表によると、天保三年正月二日上演の「生写朝顔話」に添削者耶麻田加々子として名を出して以来、天保年間長らく添削者として山田案山子の名を見せ、また平亭銀鷄の「讀本遊藝能略」の巻頭に「浪花風流聽諸大人銀鷄先生乃旅亭平訪布之図」の中に、市川白猿（七世市川團十郎）などという俳優や芸人、上田公長などの書家、楠里亭喜楽などの文人とともに山田野亭の顔が見えており、その文人としての交遊の広さがうかがわれ、書家であり狂歌を善くしたという浪華人物誌の記述とともに、幕末期上方文人の一つのタイプが浮んでくる。が、それらについては稿を改めなくてはならない。

註1、中村幸彦著「近世小説史の研究」所収「説本發生に関する諸問題」参照

註2、拙稿「上方説本展開の一側面―仏教長篇説話ものの継承について―」近世文芸稿六参照

( ) この稿は、「国文学攷」第二十二号発表の拙稿「後期説本群の一分野―『図会もの』について」について、中村幸彦先生から色々御教示いただいたことに啓発されたもので、昭和三十六年度春季近世文学会（於日本大学）の席上で発表したものに手を加えたもの。